

九州の万葉集と風景画シリーズ（第七回）

かね みさき し か すめかみ
「鐘の岬」〈志賀の皇神〉

古代の旅の交通手段としては馬・徒歩・船があげられるが、どの交通手段の旅も常に危険と隣合わせであった。それだけに旅人は 陸路の旅は道の神、坂の神に敬虔（けいけん）な手向けをし旅の無事なることを祈ったが、海上航行にあってもそれは変わらず危険な海峡などでは海の神に無事を祈っていた。

四万葉集に海の神に無事を祈りながら九州の海を航行した次の歌がある。

・ちはやぶる 鐘の岬を 過ぎぬとも われは忘れじ

すめかみ

志賀の皇神

卷七—一二三〇 作者不詳

（解説）恐ろしい神の荒れ狂う鐘の岬を漕ぎ過ぎてしまったとしても、私は忘れまいよ、志賀にいます海の守り神の御加護を。

・この歌の題詞は「羈旅（きりよ）にして作る」く（旅情を詠んだもの）の一首である。

・作者不詳となっているが荒津（今の博多港）から船出して九州の西北岸を通り、瀬戸内海から奈良の都へ向かう官人が旅情を詠んだものとの説がある。

滝口弘氏著の「九州の万葉」には、「この一首は、波が荒く危険の多い鐘の岬を通るに際して、あらためて博多湾口を遥かに振り返り、志賀海の神に航行の無

事を祈ったものである。」と述べている。

(1) 鐘の岬

・この歌に詠われている「鐘の岬」は福岡県宗像市鐘崎の北端にある岬である。
JR鹿児島本線「東郷駅」で下車、「鐘崎車庫」行の西鉄バスに乗車すると約40分ぐらいで終点に着く。バスを下車すると潮の香りが爽やかで気持ちがいい。福岡県内随一の水揚げ高を誇る漁師町「宗像市鐘崎」の街を前方の岬に向かって約15分歩くと岬の先端に突出した半円形の樹木に覆われた岡が見えてくる。この地が「鐘の岬」である。



(西鉄・鐘崎車庫バス停から鐘崎の街の後方に見える「鐘の岬(織幡山)」を撮影)

滝口弘著「九州の万葉」によると「この岡の山頂部には、平安時代の延喜五年

(905)に編纂がはじまった延喜式という神名帳に〈筑前国宗像郡・織幡神社〉として掲載された古社で航海安全の守護神を祭る織幡神社(現・宗像大社

末社）が鎮座し、岡の高さは約60mで織幡山とも佐屋形山とも呼ばれ、古くから付近航行の船舶のよい目標となり、崇敬の対象となっている。」と述べている。この岡の山頂部近くにある本殿付近の台地に立つと眼下に美しい海岸線、遠くには海に浮かぶ島々などが展望できる形勝の地である。

☐宗像市鐘崎の北端の岬「鐘の岬」と対峙する北西約2km海上に浮かぶ周囲9.

3kmの小島「地島」じのしま（宗像市地島）との間の瀬戸が西に玄界灘、東に響灘の境にあたる。この狭い海峡は暗礁が広がり、また、潮の流れが激しく、波が荒く、古代から筑紫路航海の難所として有名であった。

・地元漁師の話では今も海の難所で季節あるいは時間帯によっては沿岸部から離れ、かつ速度を落とすなどして船の安全な運航をしているとのことであった。

（写生地）宗像市鐘崎にある古社・織幡神社前から鐘の岬に突き出た織幡山（佐屋形山）の麓と玄界灘と響灘の境界域に浮かぶ「地島」を描く。（池田杏花）



☐「鐘の岬」の地名は、昔、三韓から渡来した釣鐘を積んだ船が織幡山の沖合で沈んだところといういい伝えがあり、このことから「鐘の岬」というようになったという説がある。

・織幡神社参道の近くには「後世に沈没したと伝えられた釣鐘を何人も人が引き揚げようと失敗に終わっていたが大正時代になり山本菊次郎という人が巨費を投じて、これを引き揚げることに成功したが姿を現したのが、釣鐘ではなくて、鐘に似た巨石であった。人びとはがっかりしたが、いまでも本当の釣鐘

は海底に沈んでいるとの思いを捨てかねている。このような話は【沈鐘伝説】
といって諸国に例があるが、ここのは、そのもつとも有名なものである。沈鐘
と巨石、夢と現実、まことに面白い郷土鐘崎の物語である。」との趣旨の【沈鐘
と巨石】の説明文（福岡県文化財専門委員筑紫豊氏文）が刻まれた石碑と大正
時代に鐘崎の沖合で釣鐘に間違えられて引き揚げられたと伝えられる巨石が置
かれている。

（2）志賀の皇神

万葉集で詠われている「志賀の皇神」とは福岡市東区志賀島の古代有名な海の
守護神であった「志賀海神社」の祭神「綿津見（ワタツミ）三神」を指してい
る。「皇神」は国土の守護神を尊んでいったものである。

☐志賀島は大宰府の外港である那大津（現・博多港）の北部に位置し、周囲約1
0 kmの小島で全国的にめずらしい九州本土と全長約8 kmの砂州（海の中道）
により陸続きになっている。

・志賀島は、古代日本の大陸・半島への海上交易の出発地として、歴史的に重
要な位置を占めていた。

・志賀島は昭和6（1931）年に志賀島橋が出来るまでは離れ島で九州本土
からは船で渡るか、或は本土と志賀島の間は潮が満ちれば途切れるが、潮が引
けば繋がるので、その繋がり時に歩いて渡っていたようである。

・志賀島には古代神話からの伝承が息づいており、また、神社が10数社あり年間大小70余りの祭りがあるといわれるなど1年を通して、祈りの場となる民俗行事の宝庫の島と云われている

☐志賀海神社（志賀の皇神）

・その中心となっているのが海を司る神「綿津見（ワタツミ）」を祭神とする「志賀海神社」である。志賀海神社の創建は明らかでないが平安時代に編纂された延喜式神名帳に掲載されている「筑前国糟屋郡・志加海神社」に比定される古社である。

・「志賀海神社」は古代より「海神の総本社」と称えられ、玄界灘に臨む海上交通の要衝である博多湾の総鎮守として志賀島に鎮座し、厚く信仰され「志賀の皇神」と称されていた。また、当神社には神功皇后の三韓征伐の伝承が残されている。（神社由緒から。）

・志賀島へはJR鹿兒島本線「香椎駅」でJR海の中道線（香椎線）に乗り換え終着駅「西戸崎駅」で下車し西鉄バスに乗り換え志賀島橋を渡り、志賀島に至る。・そのほかの公共機関等の交通手段としては博多港などからの連絡（渡船）。博多などからの直行バスなどがある。

西鉄バス停留所「志賀島」から街並を約500m程歩くと島の東南沿岸沿いに「志賀海神社」が鎮座する鬱蒼とした森に囲まれた丘が前方に見える。参道にある石段を上がると丘の中腹あたりの台地に神社の本殿がある。本殿横地に伊勢神宮等の遥拝所として小さな鳥居があるが、この鳥居は玄界灘を航行する船の安全を見守っているかのように建っているのが印象的であった。

（写生地）本殿前から小さな鳥居、それを支えるような大木と眼下に見える玄界灘・海の中道・博多湾と対岸に海陸交通の目印となるとともに登山等で人気のある立花山、三日月山など福岡の山並を描く。（池田杏花）



「その他参考文献」・九州万葉の旅 前田 淑著 万葉集を知る事典 東京堂出版

・九州の万葉集 筑紫 豊著 など



○鐘の崎・志賀海神社等の位置図